

# 上代籍帳の人名における連体助詞「つ」について

崔 建 植

## 1.

上代日本語には連体格を示す助詞として「つ」「の」「が」がある。このうち「つ」は主として体言に付いて連体修飾語を作る用法しか持たず、体言及び活用形の連体形に付いて連体修飾節、連用修飾節の中で主格をも示す用法を持つ「の」「が」とは大別される。それは「天つ」「国つ」「奥つ」「辺つ」「内つ」「外つ」など場所を示す語に用いる場合が多く、上代にあってもその用法がすでに固定していたようである。このことは、「つ」がやがて衰退する傾向にあったことを示すものと指摘されている<sup>(注1)</sup>。

一方、連体助詞「つ」の語源については、古代韓国語の助詞「s」と同源ではないかとする山田孝雄氏(1913)の説<sup>(注2)</sup>、「ひとつ」「ふたつ」などの数詞における接尾語「つ」が関係表示の機能を持ったものとする中川浩文氏(1958)の説<sup>(注3)</sup>とがある。特に前者は、古代韓国語との関係を指摘していて注目されるが、その後、山田論を再検討するという試みはなされていない。このような状況の中で、日本・韓国両語に存するこれらの係わり合いについて、拙稿において三つの観点—機能・音価・用字—から、両者に類似性のあることを述べた<sup>(注4)</sup>。

そしてその際、大宝2年戸籍における人名表記の中には、古事記・日本書紀・万葉集などの上代文献における一般名詞では見掛けられない連体助詞「つ」の異形態表記(連体助詞「つ」と同様の役割を果たすと見られる「つ」以外のタ行・サ行の形で現れる表記形態を指す。以下、略して「異形態」とする)が多く見られることを指摘した。

本稿では、この表記面での現れ方を重視し、上代語の人名における連体助詞「つ」表記及びその異形態をさらに広く観察し、そこに見られる諸相における意味合いについて音韻論的な検討を加えることにしたい。なお資料は、大宝2年戸籍を含めて養老戸籍・計帳類などの正倉院文書に見られる人名表記を中心に行う。

## 2.

正倉院文書は奈良時代の戸籍を始めとして計帳・歴名などに多量の人名を残している。今回調査の対象としたのは、戸籍・計帳・歴名<sup>(注5)</sup>などに見られる人名表記のうち、連体助詞「つ」表記及びその異形態についてである。

先ず、戸籍における一般的な連体助詞「つ」の用例のうち、「つ」を表記するもの(用例A)と「つ」が表記されないもの(用例B)とを挙げると、次の〈表1〉のようになる。



〈表1〉戸籍における連体助詞「つ」の表記例

No.	人名	用 例 A	用 例 B
1	姉	姉都売、小姉都売、阿根都売、阿尼都売、姉豆売、阿尼豆売、姉つ売、阿尼つ売	姉売-古姉売-子姉売-真姉売-和姉売-小姉売、阿尼売-安尼売-阿泥売-阿根売-古阿根売-小阿尼売
2	海人	阿麻豆売	阿麻売-古阿麻売、阿真売、阿万売
3	稲	稲都売、稲津売、伊奈豆売	稲売-小稲売、伊尼売 / 比稲、稲麻呂
4	磐	伊波豆売	伊波売、伊波比売 / 小伊波、磐麻呂
5	飯	伊比豆売	飯売-忌飯売-小飯売、伊比売
6	妹	妹津売、伊毛豆売、伊母豆売	妹売-弟妹売-古妹売-子妹売-小妹売、妹女-小妹女、伊母売、伊毛売
7	午	馬都売、馬津売	宇麻売 / 馬-荒馬-古馬、宇麻
8	息	意伎都売	意伎売
9	大	大津売	大売 / 大、大麻呂、意富麻呂
10	咋	咋都売	久比売、咋売 / 咋、久比麻呂
11	黒	黒豆売、黒つ売	黒売-真黒売-小黒売、黒女 / 黒-小黒、黒人、黒麻呂、久漏麻呂、久留麻呂
12	こ (子)	古都売、古津売、古つ売	古売-子売-大古売-宇麻古売-伊麻古売-伎奴古売-刀自古売-波真古売-麻古売-古麻古売-真目乃古売-売乃古売-若古売-乎古売-小古売-乎弥奈古売 / 古麻呂
13	酒	酒都売、酒津売	佐加売 / 佐居、佐加麻呂
14	し	志都売、志豆売 / 斯都麻呂、志都麻呂	斯売
15	醜	志許豆売	志許夫
16	嶋	嶋津売、嶋つ売	嶋売-姉嶋売-栗嶋売-稲嶋売-五百嶋売-意嶋売-置嶋売-川嶋売-古嶋売-児嶋売-足嶋売-高嶋売-千嶋売-知嶋売-津嶋売-床嶋売-豊嶋売-浪嶋売-尔古嶋売-広嶋売-真嶋売-三嶋売-八嶋売-止嶋売-吉嶋売-小嶋売、嶋女、志麻売 / 嶋-荒嶋-石嶋-五百嶋-大嶋-川嶋-足嶋-高嶋-千嶋-知嶋-手嶋-豊嶋-長嶋-根嶋-広売-真嶋-三嶋-村嶋-百嶋-八嶋-吉嶋-小嶋、志麻、嶋麻呂
17	墨	須弥豆売	墨売-大墨売-麻墨売 / 大須弥
18	た	①龍売、小龍売、多都売、多津売、多豆売 / 多都麻呂 ②多都売、多津売、多豆売 / 多都麻呂	①龍麻呂、龍、身龍、小龍、多都麻呂 ②多麻呂
19	多米	多米つ売	比多米売
20	ち	知都売	知売 / 五百智、小知、乎知、知麻呂-智麻呂-子知麻呂-乎知麻呂
21	殿	止乃豆売	殿売-小殿売、止乃売 / 止乃麻呂
22	豊	止与豆売	豊売-大豊売-小豊売、止与売-小止与売、止世売 / 等与-小止与、豊麻呂、止与麻呂
23	縄	那波豆売	縄売-大縄売-真縄売、乎那波売 / 千縄
24	椿	奈良豆売	奈良売
25	ね (子)	根都売、泥豆売、麻泥豆売	根売-赤根売-真根売-小根売、尼売-古尼売-比尼売-小比尼売-小尼売、泥売-麻泥売-真泥売 / 赤根-小根、根麻呂、尼麻呂-古尼麻呂-真尼麻呂、泥麻呂
26	久	比佐豆売	小比佐売
27	姫	比米*都売	比売、日売、姫売

28 広瀬、広瀬  
 29 廣西豆売  
 30 廣豆売  
 31 廣豆売、古廣豆売、廣豆売  
 32 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 33 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 34 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 35 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 36 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 37 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 38 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 39 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 40 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 41 廣豆売、古廣豆売、廣豆売、廣豆売  
 ◇(14) 兄弟姉妹に見られる「廣豆売」は「廣豆売」と認める。  
 ◇(18) 十二支の「たつ」は「たつ」と認める。  
 153, 63, 57, 63, 134, 517, 「田売」  
 素とする用例もあり、両方とも認める。  
 の両方を認めておく。  
 ◇(27) 「住用比米(万・益・40番)」  
 あろう。  
 ◇(31) 「まつ(松)」とも解せられる。  
 記と認める。  
 ◇(35) の用例は、筑前国戸籍に「比豆売」  
 9) 見えており、これを「売」に附する  
 売」は56、高山本店、1977年により、  
 大坂府給歴名帳に「売豆売」12/22、  
 などの用例が見える。  
 全体として連体助詞「つ」は、岸  
 前国(8)・豊前国(10)・下関国(12)戸籍  
 それぞれ11=17(「都」1、「つ」10)、  
 2)、11=9(「都」2、「豆」7)、11=8  
 「根」1、「津」12)、11=2(「豆」2)、  
 を見せている。



28	広	広都売、広津売	広売-真広売-小広売、広女-小広女、比呂売 / 広-小広、比呂、広麻呂、比呂麻呂
29	布施	甫西豆売	布施売 / 乎布西
30	穂	穂豆売	秋穂女 / 伊美吉豊穂
31	ま	真都売、古真都売、麻都売	万売-知万売-真万売-小万売、真志真売-真千真売-八千真売-依真売-小知真売-乎知真売、意利麻売-古麻売-多志麻売-多治麻売-麻志麻売-依麻売-弥奴麻売-弥怒麻売-乎麻売-小知麻売-小怒麻売 / 真人、麻麻呂
32	み	弥都売、乎弥豆売 / 弥豆麻呂、御豆麻呂	宇須弥売-志つ弥売-嶋弥売-奈留弥売
33	已	已都売、身豆売、未豆売、尾豆売	身売-石身売-馬身売-小身売 / 身-方身-金身-歳身-諸身-小身、身麻呂
34	宮	宮津売	宮売-真宮売-若宮売-小宮売、弥移売、弥屋売 / 宮男、宮麻呂
35	女	咩豆売	cf. (売豆売、女津売、女津女)
36	目	目都売、目津売、米豆売	五百目売-黒目売-広目売-細目売-細米売-小目売 / 高目-長目-速目-広目
37	安	安都売	安売-赤安売-古安売-子安売-麻安売 / 安-赤安-大安-加良安-辛安-古安-得安-果安-小安 / 安麻呂
38	やり	也里都売	也理売、也利売
39	よ	与都売、与豆売	与売-古与売-布与売-乎与売 / 古与、与麻呂
40	若	若津売	若売-弟若売-子若売-真若売、和加売 / 若麻呂
41	を	小都売、乎都売、小短売、小津売	乎売-小売、乎比売 / 乎麻呂-小麻呂

◇(14) 兄弟間に見られる「綾麻呂-志都麻呂(1/215)」のような人名の場合は、「志都=しつ(倭文)」と認める。

◇(18) 十二支の「たつ(辰)」の音仮名表記と考えられる。しかし、「多売」(2/223)、「多麻呂」(1/53、53、57、63、134、517)、「田売」(2/214)、「田麻呂」(1/545)など、「た」を名の主要な形態素とする用例もあり、両方とも解せられるので、ここでは仮に「たつ(辰)」と「た+連体助詞」との両方を認めておく。

◇(27)「佐用比米(万・巻5-871番歌)」と同じように、「姫」の「メ」(甲類)を乙類に混同した例であろう。

◇(31)「まつ(松)」とも解せられるが、用例Bなどにより、ここでは1音節語の形態素「ま」の表記と認める。

◇(35)の用例は、筑前国戸籍に「咩豆売」として8例(1/100、105、111、126、132、133、136、139)見えており、これを「売」に対する変字法的用字と認められる大野透氏(『続万葉仮名の研究』p. 56、高山本店、1977年)により、「咩」は「女」を表す音仮名と見做す。戸籍以外では出雲国大税賑給歴名帳に「売豆売」(2/223、226、233)「女津売」(2/220、223、226)「女津女」(2/212)などの用例が見当たる。

全体として連体助詞「つ」は、岸俊男氏(1973)の分類によって示せば、美濃国(A)・筑前国(B)・豊前国(C)・下総国(E)戸籍における人名表記に合わせて156例見えており、それぞれA<sub>1</sub>=17(「都」7、「つ」10)、A<sub>2</sub>=17(「都」17)、A<sub>3</sub>=5(「都」5)、A<sub>4</sub>=2(「都」2)、A<sub>5</sub>=9(「都」2、「豆」7)、A<sub>6</sub>=36(「都」21、「津」15)、B=49(「都」1、「豆」35、「短」1、「津」12)、C<sub>2</sub>=2(「豆」2)、C<sub>3</sub>=2(「豆」2)、E<sub>1</sub>=17(「都」16、「津」1)の分布を見せている。



〈表2〉戸籍における連体助詞「つ」の国郡別分布

	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>	A <sub>3</sub>	A <sub>4</sub>	A <sub>5</sub>	A <sub>6</sub>	B	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	E <sub>1</sub>	計
都	7	17	5	2	2	21	1			16	71
つ	10										10
豆					7		35	2	2		46
椀							1				1
津						15	12			1	28
計	17	17	5	2	9	36	49	2	2	17	156

そして、連体助詞「つ」の用字上の特徴として、国郡別使い分けのあることが認められる。先ず美濃国の場合、加毛郡において「小都売」(1/57、85)、「根都売」(1/57、76)、「古津売」(1/62、65、68、76、78、92)などの一部の用例を除いて、原則的に「都」は音仮名、「津」は正訓字に下接し、音・訓によって使い分けているのに対して、それ以外においては、上接字に拘らず音仮名「都」(美濃国共通で見られる)、「つ」(味峰間郡のみ)、「豆」(山方郡のみ)を当てる。筑前国の場合は、「小椀売(1/104)」の1例を除くと、音仮名には「都」(「志都麻呂」1/121、の1例)・「豆」、正訓字には「津」を当てる。豊前国の上三毛郡(加目久也里)・仲津郡の場合は、何れも音仮名に当てた「豆」の用例だけである。下総国の葛飾郡の場合は、正訓字に当てた「津」(「嶋津売」1/277)の1例以外には、一部の用例(「真都売」1/222、269、「古真都売」1/222)を除いて、音仮名に下接した「都」が見当たる。

こうして見ると、全般的には、訓仮名「津」の使い分けを別に考えると、下総国戸籍には「都」が、筑前国・豊前国など所謂西海道戸籍には「豆」が大勢を占め、美濃国には両方の用字をしているという特徴がある。特に、美濃国戸籍に見られる多様な用字の現れ方は、東西の合間に位置するという地域的な特性によるものと考えられる。しかし、一部の語彙における次の例のように、美濃国の東国的要素が窺えるものもある。例えば、東国語とされる「手児(テコ)」の人名例が、「手古」(1/18—美濃国)、「手古売」(1/14、39、40、85—以上、美濃国)、「手子売」(1/220、228、237、285、287、294、302—以上、下総国)、「小手子売」(1/228—下総国)、「乎手子売」(1/285—下総国)などのように、西海道戸籍には1例も現れないで、美濃国と下総国の両国にだけ現れるというのがそれである。

### 3.

一方、戸籍における上記のような連体助詞「つ」の一般的な表記に加えて、同じく戸籍及び計帳・歴名などの人名表記において、連体助詞「つ」と同様の役割を果たす、その異形態と考えられる用例が以下の〈表3〉のように、様々な形で多く出てくることに注意される。

(表3) 戸籍及び計帳・歴名などの人名における連体助詞「つ」の分布

人名	計帳・歴名	戸籍
1 子	阿古	
2 船	阿古	
3 住	阿古	
4 石	阿古	
5 市	阿古	
6 豆	阿古	
7 茂	阿古	
8 船	阿古	
9 船	阿古	
10 船	阿古	
11 船	阿古	
12 船	阿古	
13 船	阿古	
14 船	阿古	
15 船	阿古	
16 大	阿古	
17 船	阿古	
18 船	阿古	
19 船	阿古	
20 船	阿古	
21 船	阿古	
22 船	阿古	
23 船	阿古	
24 船	阿古	
25 船	阿古	
26 船	阿古	
27 船	阿古	
28 船	阿古	
29 船	阿古	
30 船	阿古	



〈表3〉戸籍及び計帳・歴名などの人名における連体助詞「つ」の異形態と考えられる用例

No.	人名	タ行音系統の用字	サ行音系統の用字	ナ行音系統の用字	男性名
1	吾子		阿古須壳		阿古麻呂
2	鮎	阿由提壳			
3	在	在手壳			有麻呂 / 阿理、在、在当*
4	石	(石津壳、石津女)			石麻呂 / 石手
5	市	市手壳			市麻呂
6	伊豆		伊豆志壳		
7	戌	犬手壳			大麻呂 / 伊奴、伊怒、犬、犬手
8	稻	稻手壳	伊尼斯壳、伊奈志壳		稻麻呂、否麻呂、稻男 / 稻手、稻当*
9	磐				磐麻呂 / 伊波田、伊波西
10	飯	(飯津壳、飯津女) 飯手壳			飯麻呂 / 飯手
11	郎				伊良都
12	卯	汗手壳、宇旦壳、宇代 壳、宇提壳		汗奈壳、宇奈壳、宇 那壳	宇麻呂、汗麻呂、宇奈麻呂 / 宇手、 宇提、菟手
13	丑	牛手壳、宇志提壳			牛麻呂、宇志麻呂 / 牛、牛手
14	午	(馬津女) 馬手壳		馬名壳	馬、宇麻、馬人、馬手、小馬手
15	生	意比*止壳、意比*等壳			意比*、意斐、大生、意比*止麻呂 / 意比*止、意比*等
16	大	大手壳、小大手壳			大麻呂、意富麻呂 / 大、大多、大田、 大津
17	伎	伎手壳			伎麻呂、伎太麻呂
18	櫛	櫛手壳		櫛名壳	
19	組	組手壳			
20	黒	黒多壳、黒太壳、黒当* 壳			黒麻呂、久漏麻呂、久留麻呂 / 黒、 黒田、黒当*
21	こ (子)	(古豆壳、子津女) 古太壳、古田壳、古当* 壳、古手壳、古旦壳	古志壳、古自壳	古奈*、古奈壳、 古乃壳	古麻呂、古万呂 / 古都、古手
22	さ	佐旦壳			佐都麻呂
23	酒	(酒津女) 酒田壳、酒手壳			佐居、佐加田、酒手
24	し	志手壳			志都麻呂、斯都麻呂
25	志賀		然志壳		
26	穰	志祁太壳、志祁太女、 志祁多壳、志祁多女、 志祁田壳			
27	塩	塩手女			塩、志穂
28	嶋				嶋麻呂 / 嶋、志麻、嶋手
29	菅	須加代壳			小菅麻呂
30	少	須古太壳、宿古太壳、 宿太壳、宿太女、須古 多壳、須古提壳、宿提 壳、宿古代壳		宿奈壳、宿奈女、 足奈壳	宿奈麻呂 / 乎足奈、少提



31	墨			須美乃壳	真墨、小墨
32	た	多刀壳	太志壳-乎多志壳、多 次壳、田次女、多須壳、 太須壳、田須壳		多麻呂、田麻呂、多都麻呂、多太磨、 多太万呂、多須麻呂 / 多都、田次
33	辰				龍麻呂、龍万呂 / 龍、身龍、小龍、 龍手
34	玉	(玉津壳、玉津女) 玉手壳	多真志女		多麻、荒玉、小玉
35	ち	(知豆女) 知代壳	知志壳、知西壳		知麻呂、智麻呂 / 知西
36	殿	等能提壳			殿麻呂、止乃麻呂
37	寅	刀良代壳			刀良
38	酉				鳥麻呂、止利麻呂 / 鳥、鳥手、鳥代
39	な	名代壳、奈刀壳、奈等 壳	奈佐壳		奈所麻呂、名人 / 名多
40	縄	縄手女			
41	梗				梗麻呂 / 梗、梗手、奴加手
42	子	(祢都壳、祢津壳) 根 手壳、尼手壳、尼豆壳	泥志壳	祢奈壳、祢奈女	根麻呂、尼麻呂、泥麻呂、祢麻呂、祢 万呂 / 根手、泥志
43	能登		能登志女		
44	法	法提壳			法麻呂
45	火	火豆壳			
46	姫	(比女豆女) 比壳知壳			
47	枚	枚太壳			枚夫、比良夫、比羅乎、枚麻呂 / 枚 田
48	広	広田壳、広手壳	比良司壳		広麻呂、広万呂、比呂麻呂 / 広、比 呂、広人、広多、広田、広津
49	鰻	布久止壳			
50	へ <sub>2</sub>	閉止壳	小倍志壳		悪閉、加羅閉、加良閉、閉志、小閉志
51	穂	富等壳			伊美吉豊穂
52	ま	麻豆壳、麻刀*、麻刀壳、 真等壳	麻志壳、麻志女、麻須 壳、真須壳、麻世壳	麻奈壳、真名壳、	麻麻呂 / 真人、麻志、真須
53	槓	卷手壳			卷手
54	眉		目与須壳		
55	み	弥都*、弥豆壳	弥曾壳	弥奈壳	弥豆麻呂、御豆麻呂 / 弥等
56	見	目見代壳、見出女			置見、堅見
57	已	(身津壳)			身麻呂、尾麻呂 / 身、身太、身多、 身都、身津、身手
58	宮	宮手壳			宮麻呂 / 宮男
59	棕	棕手壳、牟久提壳			棕麻呂 / 棕人、棕手
60	虫	虫多壳、虫手壳		虫名壳、虫名女、虫 奈壳、牟志奈壳、牟 志奈女、牟志那壳	虫麻呂、虫万呂 / 牟志、虫名、虫奈、 牟志那
61	女	(壳豆壳、女津壳、女津 女) 女知壳			



62	目	(目津女) 米太壳、米太女、目知壳、米知壳			目太、目知、米知
63	百	百手壳、毛>知壳			毛毛、百
64	家/宅	(宅津壳) 屋止壳	屋須壳、屋加須壳		
65	安				安麻呂 / 安、安多、安都、安津、安豆
66	蕨		夜夫志壳		夜夫麻呂、蕨万呂
67	やり				也里都
68	よ	与太壳、与知壳	与佐壳、与志壳、与曾壳		与麻呂、与曾麻呂 / 古与、与津
69	淀		与止*志壳		与止*
70	亥	猪手壳		猪奈壳、猪名壳、猪中女	為麻呂、猪麻呂、亥麻呂、猪名麻呂 / 猪、猪手
71	礼	礼手女			
72	恵	恵止壳			恵麻呂
73	小	小田壳、小田女、小当*壳、小大壳、平太壳、平手壳、平豆壳、平提壳、小等壳、平等壳、小得壳	小志壳、小之壳、平須壳、平西壳	平奈壳、古平奈壳	小須、平麻呂、小麻呂、平手麻呂
74	男				雄田麻呂、雄田万呂

◎ (一)内の表記は、戸籍以外に現れた連体助詞「つ」表記の初出例である。

◎ (21)(52)(55)の「古奈」(1/306)、「麻刀」(1/305)、「弥都」(1/306)は、陸奥戸籍における女性名の表記である。

◎ (3)(8)(20)(21)(73)における「当」は、他の類似の表記例により音仮名「た」と認める。

◇(15)「首(おびと)」の表記とも考えられるが、「意比壳」(1/3、62、73、73、78)、「意斐壳」(1/343)、「生壳」(2/227、229、241)、「生女」(2/245)、「意比」(1/35、58、47)、「意斐」(2/227)、「大生」(1/17)の表記の見られるところから、「意比(おひ1)」は「生(おひ2)」の混用例と判断し、「おひ(生)+と」の語構成として認める。

◇(25)「志我麻呂」(6/434、445)、「然之海人者…」(志賀の海人は…、万・巻3-278番歌)などにより、地名「志賀」の借訓表記として考えられる。(6)「伊豆志壳」(1/66)、(43)「能登志女」(2/215)も地名に下接した「し」の用例であり、同じ語構成として参考となろう。

◇(69)「与止志壳」(2/225)における「与止」は、「与杼女」(2/214)、「与杼美壳」(2/204)の表記例より「よ2ど2(淀)」と考えられ、清濁の間違った表記として認める。「与止壳」(1/117、2/219)、「与等女」(6/438)、「与止」(1/50)の例もこれに準じて考える。

〈表3〉で見るように、連体助詞「つ」の異形態と考えられる用例が異様なほど目立っているが、本章では、これらの用例に現れた用字上の諸特徴について概観し、以下連体助詞「つ」とその異形態とにおける両者の関連性について検討を行うことにする。

まず、一番多くの用例を見せるのは、タ行音系統の用字例である。中でも「て(で)」(亅・提・代/手・出)、「た(だ)」(多・太・当・大/田)が大勢を占め、「ち」(知)、「と1」(刀)、



「と<sub>2</sub>」(止・等・得)が一部の人名に見られる。次は、サ行音系統の用字例である。「し」(志・自・次・之・斯・司)が多く見え、その他「さ」(佐)、「す」(須)、「せ」(世・西)、「そ<sub>1</sub>」(所)、「そ<sub>2</sub>」(曾)が一部の人名に見られる。そして、ナ行音系統の用字例は、連体助詞「の」或いはその古い形とされる「な」表記の見られる人名例であるが、これは連体助詞「つ」及びその異形態と対比するため掲げたものである。ここでは、(21)「古乃売」(1/493)、(31)「須美乃売」(1/498)のように、明らかに連体助詞「の<sub>2</sub>」の表記例として考えられるものが見当たる他、「那・奈ノ名・中」などの用字をする「な」が一部の人名に見られている。

なお、男性名の場合も、女性名における異形態の場合と同じ種類の用字が見られる。ただ、「-多(太・当ノ田)・-知・-都(豆ノ津)・-提(代ノ手)・-止(等)」・「-志・-須・-西」・「-那(奈ノ名)」などのように、男性名を表す接尾語「麻呂(子・人)」を介さないで連体助詞終りの人名の多数あることが見受けられる。これは、外見上接尾語或いは複合語における後項とも見られるようだが、女性名における連体助詞の用字と全く形を同じくする点、そして男性名の中には連体助詞「つ」と考えられる「伊良都」(1/225)、「古都」(1/71)、「広津」(6/430)、「身都」(1/36)、「身津」(1/68、70、89)、「安都」(1/60)、「安豆」(1/53)、「安津」(1/75)、「也里都」(1/71)、「与津」(1/67)のような表記例の存在することなどから、男性名における連体助詞終りの人名は、この連体助詞「つ」及びその異形態が接尾語的に固定して使われたものであらうと推察される。「伊良都」は、下総国葛飾郡戸籍に出てくる人名であるが、上代において「郎子」「郎女」は古訓・訓注などで「いらつこ」「いらつめ」と訓み習わしているものである。しかし、上記の1例を除けば戸籍及び計帳類においては、全て女性名に「伊良売」(1/223、226、232、241、248、249、255、269—以上E<sub>1</sub>、1/293、295—以上E<sub>2</sub>、1/531—L<sub>3</sub>)、「子伊良売」(1/229—E<sub>1</sub>)、「古伊良売」(1/245—E<sub>1</sub>)という音仮名表記で現れ、表記上の相違が見られるが、これは文献の位相差によるものであらうか。

また、〈表3〉における連体助詞「つ」の異形態と考えられる表記例74例のうち29例(太斜体の数字)は、〈表1〉と重出する語彙の用例であるが、この数値は〈表1〉における連体助詞「つ」の表記例(41例)対比約71%を占める割合で、これによって考えても連体助詞「つ」表記とその異形態とに、ある種の緊密な関係が推測されるのである。

さらに、〈表1〉〈表3〉で共通して言えることは、連体助詞に上接する名の形態素の部分が、〈表1〉における「小姉(を<sup>あ</sup>ね)都売」(1/33、44)の1例を除けば、全てにおいて1・2音節の短い音節語であるという点である。これは、井手至氏が上代日本語における使用語彙の音節数について

上代語では、三・四音節語が圧倒的に多く、全体の三分の二を占める。…(中略)…三・四音節語について多いのが二音節語である。二音節語には、それから種々の語を派生する語基的な語彙が多い。五音節語には二音節語の約半数、六音節語以上のものは非常にすくなくなる。一音節語は、語数は多くないが、二音節語と同様に国語の基本的な語基で占められている。平安時代以後も一音節語はほとんどあらたに増加せず、むしろ、その派生語や複合語と競合して用いられなくなる傾向にあるから、相対的比率においては、上代語が一番高いといえる。それだけに、上代語には一音節語の同音異義語の数が多く、つぎに示したように、国語のほとんどの音節に互って一音節語(語基を含む)が存在することは注意すべき事実である。



と指摘されているように<sup>(注6)</sup>、日本語における1・2音節語の全体から占める比率が低いという傾向と相反する結果として注目される。言い換えれば、〈表1〉の用例Bのような複合による多音節語には連体助詞「つ」は付きにくいようである。〈表1〉における1・2音節語の占める割合がそれぞれ32%(13例)、68%(28例)であり、同じく〈表3〉における1・2音節語の占める割合がそれぞれ31%(23例)、69%(51例)であって、大体において1音節語対2音節語の比率が1:2という割合になっていることが見受けられる。しかし、この比率は、〈表1〉と〈表3〉とに重出する語彙の頻度ということになると、一気に逆転する。即ち、1音節語の場合、形態素の示す語義の問題はあるが(〈表4〉及び注(8)を参照のこと)、〈表1〉に現れた13例全てにおいて、連体助詞「つ」表記の他、その異形態としても現れるのに対して、2音節語の場合は、〈表1〉に現れた28例のうち16例の異形態が現れるに止まる。この事実から見る限り、1音節語の場合が2音節語の場合より、連体助詞「つ」及びその異形態との結び付きの緊密さがさらに深いことが見受けられる。

特に1音節語の場合には、名の意義部分が捉えにくく、なお同音であるがゆえに同名異人の出てくる恐れもあって、人名の持つ重要な役目の一つである他者との弁別が保てにくくなることが考えられる。この場合、1音節語の持つこのような意味上の不明瞭さと語感の上における不安定さを避けるために、例えば、1音節語の「こ(子)」を、人名における使われ方において、「大古売」「宇麻古売」「伊麻古売」「伎奴古売」「刀自古売」「波真古売」「麻古売」「古麻古売」「真目乃古売」「売乃古売」「若古売」「乎古売」「小古売」「乎弥奈古売」などのように、接頭語的なもの或いは説明的要素の語を修飾的に前に添えて複合語を作ったり<sup>(注7)</sup>、「古都売」「古豆売」「古つ売」「古津売(女)」「古太売」「古田売」「古当売」「古手売」「古弓売」「古志売」「古自売」「古奈売」「古乃売」などのように、名の形態素としての「こ」と女性名接尾語「売」の間に連体助詞を添えることで、音節上の安定化を図ったものと考えられる。上記の他の1音節を持つ人名の場合にも、これに準じて考えられるであろう。



〈表4〉前項語による連体助詞異形態の分布 (A群=語義未詳語群、B群=形態素語群)

分類	音節数	末母音	前項語	タ行音系統					サ行音系統				
				た	ち	つ	て	と	さ	し	す	せ	そ
A群	1	a	さ、た、な、ま	○		○	○	○	○	○	○	○	○
		i	し、ち、ひ、み、き、ち	○		○	○			○		○	
		u											
		e	め、へ、ゑ	○	○	○		○					
		o	ほ、よ、を	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	2	a											
		i	やり、いち、おひ			○	○	○					
		u	やす*	○		○							
		e	ため			○							
		o	あご								○		
B群	1	a	や(家)			○		○			○		
		i	み(巳)、み(亥)	○		○	○						
		u	う(卯)				○						
		e	ね(子)、め(女)		○	○	○			○			
		o	こ(子)	○		○	○			○			
	2	a	あま、いな、いは、うま、さか、しま、なは、なら、ひさ、ひら、みや、わか、いら、しが、たま、とら、ぬか、みや、やか	○		○	○			○	○		
		i	いひ、おき、くひ、すみ、あり、いし、うし、くし、くみ、とり、まき、むし	○		○	○						
		u	あゆ、いぬ、すく、たつ、ふく、むく、やぶ	○			○	○		○			
		e	あね、いね、ひめ、ふせ、しけ	○	○	○							
		o	いも、おほ、くろ、しこ、との、とよ、しほ、すこ、のと、まよ、もも、よど	○	○	○	○			○	○		

〈表4〉は、〈表1〉〈表3〉に現れた連体助詞「つ」及びその異形態を含んだ語彙における前項語の末母音による、その異形態の分布を示したものである<sup>(注8)</sup>。上記の表から見られるように、ここで一つの傾向のあることが見受けられる。それは、「つ」の表記をする連体助詞「つ」の一般的な形においては、前項語の末母音が「-u」の形を取らないことである(もっとも、A群に「やす」の例が見当たるが、これは音仮名「あ」とも訓めるので今は例外として扱う)。これは上代文献一般についても言えることで、数多くの連体助詞「つ」を含む語彙のある中で、「迦具土神(かぐつちのかみ、上巻)」「湯都々間櫛(ゆつつまくし、上巻)」「湯津香木(ゆつかつら、上巻)」「由都麻都婆岐(ゆつまつばき、下巻・歌謡57番歌)」「(以上、古事記)」「軻遇突智(かぐつち、巻1)」「湯津爪櫛(ゆつつまくし、巻1)」「湯津杜樹(ゆつかつらのき、巻2)」「(以上、日本書紀)」「於久都奇(おくつき、巻18・4096)」「奥津城(おくつき、巻9・1807)」「奥津城処(おくつきどころ、巻3・432)」「湯都磐村(ゆついむら、巻1・22)」「(以上、万葉集)」「由都五百篁(ゆついほたかむら、中臣壽詩)」「湯津磐村(ゆついむら、御門祭)」「湯都磐村(ゆついむら、六月月次)」「(以上、祝詞)のように、「かぐ」<sup>(注9)</sup>「おく(奥)」「ゆ(斎)」などごく限られた語彙において現



れるのみである。そうならば、B群におけるウ列音に下接する連体助詞「つ」の異形態は、同列母音の連続を避けた形跡として受け止められるし、B群のウ列音以外においても、「ね」(エ列+て)「いな・いは・さか・ひら」(ア列+た)など一部の用例を除くと、やはり各列における同列母音の連続を避けたと考えられることに気付かれるのである。

〈表5〉B群における連体助詞「つ」及びその異形態の国別分布

			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	計	
女性	行音	た	19	4	4							1		5		6				39	
		ち	3																	3	
		つ	57	43	2		14							3		31	1			151	
		て	18	11	50	2								1		5		1		88	
		と	2																	2	
	計		99	58	56	2	14					1		9		42	1	1		283	
	名音	さ																			
		し	4	4	1									1		2					12
		す	3																		3
		せ																			
		そ																			
	計		7	4	1									1		2					15
小計		106	62	57	2	14						1		10		44	1	1		298	
男性	行音	た	13	1															1	15	
		ち																			
		つ	5				1							1				1		8	
		て	18	8	52		1							1		5				85	
		と																			
	計		36	9	52		2							2		5		1	1	108	
	名音	さ																			
		し		1																	1
		す																			
		せ	1																		1
		そ																			
	計		1	1																	2
小計		37	10	52		2							2		5		1	1	110		
合 計			143	72	109	2	16					1		12		49	1	2	1	408	

〈表5〉は、比較的形態素の語義の明らかなB群に下接した連体助詞「つ」及びその異形態の国別分布を示したものである。全体的に一瞥して、国別に偏りを見せていることが分かる。美濃国戸籍における連体助詞「つ」の多様さは前述した通りであるが、その異形態においてもなお多様さを見せている。この美濃国(A)の場合、全体(408例)から占める割合が約35%(143例)で、国別では一番優位に立っている。そして、筑前国(B)・豊前国(C)・豊後国(D)など、西海道戸籍に合わせて約45%(183例)、出雲国大税賑給歴名帳(N)に約12%(49例)、その他下総国戸籍(E)に約4%(16例)、山背国計帳(L)に約3%(12例)などである。特に、下総国戸籍においては載せてある人名の数に比べて、連



体助詞「つ」の使用度が低く、なお男性名における「馬手」(1/269)の異形態の1例を除けば、全部「つ」の表記ばかりで、他の国に見られるような連体助詞「つ」の異形態における多様さとは異なる特徴を見せている。

それから、タ行として現れる連体助詞「つ」とその異形態との割合が、女性名においては大体において53%(151例)対47%(132例)、男性名においては7%(8例)対93%(100例)とあって、全体として40%(159例)対60%(232例)となり、異形態の使用度が勝っていることも一特徴であろう。中でも「て」の著しい使用(173例)が目立ち、次いで「た」の使用(54例)順である。特に、男性名の場合、全用例において、女性名における「売」のような名前に付く接尾語を介さない連体助詞終りのもののみという特徴がある。これについては恐らく、連体助詞「つ」及びその異形態が接尾語的に固定して使われたであろうと前述したが、これは人名における連体助詞「つ」の使われ方と、古事記・日本書紀・万葉集などにおける一般名詞のそれとは、その文法的機能の異なることと関係があるように思われる。即ち、人名中に見られる連体助詞「つ」は、一般名詞における文法上の格成分となる「つ」とは多少異なり、形態素間を繋ぐ要素としての機能が強かったことが考えられる。男性名における連体助詞終りの人名が多く見られるのも、「つ」(異形態をも含めて)が文法上の要素として十分に機能していないことを示していると言えよう。ただし、男性名における連体助詞終りの用法は、女性名の場合に比べて余りに顕著な相違の見られるところであり、男性名におけるこのような連体助詞の接尾語的な使われ方については、機会を改めて論じることにはしたい。

また、サ行として現れる連体助詞「つ」の異形態は、用例数においてタ行のそれに比べれば遥かに少ない。そして、それは主に「し」として現れているが、これは恐らく古代韓国語の持格助詞「s」の用字と関係しているように考えられるものであり、詳しくは次章で述べることにする。

#### 4.

さて、連体助詞「つ」の異形態が正倉院文書における戸籍類以外に現れる例としては、管見によれば次のようなものがある。

- 1) (1) 果 久太毛乃 (倭名類聚抄・元和本、巻17・7)  
(2) 蕃 介太毛乃 (同上、巻18・15)
- 2) (1) 天皇父市邊押磐皇子及帳内佐伯部仲子。(ナカチコ、日本書紀、巻15・顕宗天皇即位前紀)  
(2) 等能乃奈可知師 (殿の仲子し、万葉集・巻14-3438番歌)  
(3) 百濟記云…沙至比跪 (日本書紀、巻9・神功摂政62年)
- 3) (1) ① 大伴糠手子連 (日本書紀、巻20・敏達天皇12年)  
② 大伴糠手連 (日本書紀、巻21・崇峻天皇元年)  
③ 大伴奴加之古連 (聖徳太子平氏伝雑勘文下三所引上宮記)  
(2) ① 狭手彦 (日本書紀、巻18・宣化2年11月)  
② 大伴狭手彦連 (風土記、肥前国・松浦郡)  
③ 大伴佐提比古郎子 (万葉集、巻5・871番歌・詞書)



4) (1) 志古止売志門毛 (醜乙女賤も、常陸国風土記・茨城郡)

(2) ① 伊斯許理度売 (古事記、上巻)

② 石凝姥、此云=伊之居梨度咩。(石凝ど売、日本書紀訓注、巻1・神代上)

③ 石凝姥 伊之古里止免 (日本書紀私記・乙本、神代上)

(3) 蛟 美止知 (新撰字鏡、巻8・22才)

(4) ① 年少童子 俗云=加味乃乎止古加味乃乎止売。(神男神女、常陸国風土記・香島郡)

② 少男 遠止古… 少女 鳥等咩… 置一少女 ハ乃乎止女也 乎刀女 (日本書紀私記・乙本、神代上)

5) (1) ① 任那ノ国上哆唎。下哆利。オコシタリ アルシタリ (日本書紀-国史大系本、巻17・継体6年12月)

② 任那の国下哆唎県 アロシ (日本書紀-図書寮本、巻14・雄略21年3月)

③ 下多唎の国守 アルシ (日本書紀-図書寮本、巻17・継体23年3月)

④ 南加羅 アリヒシ (日本書紀-岩崎本、巻22・推古8年2月)

⑤ 南加羅 アリヒシノ (日本書紀-図書寮本、巻17・継体23年3月)

(2) ① 曾尸茂梨 (地名、巻1・神代上)

② 蘇志麻理懸笠二蓋 各巨羅衣 (地名、西大寺資財流記帳・高麗楽器一具)

③ 蘇那曷叱知 (任那人、巻5・崇神65年、巻6・崇仁2年)

④ 毛麻利叱智 (新羅人、巻9・神功摂政5年)

(3) ① 出自ニ百済国人素祢志夜麻美乃君也。(百済人、新撰姓氏録-河内国諸蕃・依羅連)

② 依羅連同祖。素祢夜麻美乃君之後也。(同上人、新撰姓氏録-河内国諸蕃・山河連)

③ 出自ニ百済国君男弥奈曾富意弥也。(百済人、新撰姓氏録-大和国諸蕃・宇奴首)

④ 宇努首同祖。百済国人弥奈子富意弥之後也。(同上人、新撰姓氏録-河内国諸蕃・宇努造)

6) (1) 奈波手 <藤原宮木簡1>

(2) 子奈女、龍手 <平城宮木簡1> 宿奈麻呂、牧手女 <平城宮木簡2> 猪手 <平城宮木簡3>

真田麻呂 <平城宮木簡4>

(3) 宿奈売、宿奈、多須麻呂、志祁多、否手、玉須 <長屋王家木簡1> 宿奈女、身手、網手、坂田 <長屋王家木簡3>

否田、馬手 <長屋王家木簡4> 佐加田、猪手、縄手 <長屋王家木簡5>

1)における(1)(2)の用例は、それぞれ「木(の)モノ」「毛(の)モノ」の意味で、「だ」は連体助詞「つ」の古い形とされるものである。普通名詞における音仮名表記による「だ」の用例はこの2例のみであるが、<表3><表5>における人名表記として多数現れた「太・多・当・大ノ田」などの連体助詞の異形態との関連性が考えられよう。

2)(1)(2)における「中(仲)子」は、「第二子」の意味で、ともに「ナカチ(コ)」と訓ませているが、この他に

(4) 次以=上道県-封=中子仲彦。(ナカツコ、日本書紀、巻10・応神天皇22年)

(5) 皇子帳内佐伯部売輪。更名仲手子。(日本書紀-前田本・図書寮本、巻14・雄略天皇即位前紀)

のような用例が見られる。(4)における「ナカツコ」は、(1)(2)と同様の意味の「第二子」としての訓であるが、連体助詞「つ」の一般的な形の「つ」表記で表されている。また、



(5)における「佐伯部売輪」は、上記(1)における「佐伯部仲子」の本名であり、今度はその別名として「仲手子」という名前が挙げられている。そうだとすると、同一人名に当てられたこれら「チ・テ」などの表記例は、連体助詞「つ」の異形態を表すものと見て良いであろう。なお、(2)の用例は、「子」の省記という側面から考えられるものであるが、〈表3〉における男性名に多く見られる連体助詞終りの人名と合わせ考えると、この場合の「チ」は、連体助詞が接尾語的に固定して使われた用例としても考えられるところである。(3)における「サチヒコ」は、日本書紀における百濟記引用部分に出てくる人名であるが、この人物は

- ・葛城之曾都毘古之女（古事記、下巻・仁徳）
- ・葛城襲津彦（日本書紀、巻9・神功摂政5年）
- ・葛木之其津彦真弓（万葉集、巻11-2639番歌）
- ・葛城曾豆比古（続日本記、巻10・聖武天平元年8月）

などに見える武内宿禰の子であり、後の仁徳天皇皇后磐之媛の父である「ソツヒコ」に比定されるものである。原文そのままの引用によるものか、書紀編纂者による改稿が行われたものか、確かめられないが、「至」は上古音・中古音の音価がそれぞれ [tied・tʃi] であり、上代における日本漢字音では上古音を反映し、音仮名「ち」として使われたものである。何れにしても、「サチヒコ」における「チ」は、連体助詞「つ」表記のつもりで用いられたことは明らかであろう。こうして見ると、2)における「チ」表記も、〈表3〉における(46)(61)(62)(63)(68)などに見られる連体助詞「つ」の異形態「知」との関連性が考えられるところである。

3)(1)における①②③は、崇峻天皇妃「小手子」の父の同名異表記であるが、①②における現れ方は、2)における(1)(2)のそれと似ている。②における「手」終りの人名は、〈表3〉〈表5〉にも多く見られるところであり、この場合も、連体助詞の異形態のものが接尾語的に使われた例として考えられよう。戸籍にも「奴加手」(1/85)、「梗手」(1/79、196)などの人名が見える。一方、西宮一民氏は、③における「之」表記を「亘」の誤写とされたが<sup>(註10)</sup>、「之」は音仮名として「し」或いは訓仮名として連体格の「の」とも訓めるので、何れの場合においても、連体助詞「つ」の異形態と考えられるところであり、表記上の不都合はないものと見られる。また、(2)における①②③も、「大伴大連金村」の第三男の同名異表記である。この「サデヒコ」と前述の「ソツヒコ」は、日本書紀によれば、共に新羅に派遣された経歴があり、金沢庄三郎氏は、「サデヒコ」「ソツヒコ」を共に「ソ族の男子」という意味の一種の称号とされている<sup>(註11)</sup>。この説に従えば「サデヒコ」の「提(手)」も、〈表3〉〈表5〉に一番多く現れている「亘・提・代ノ手・出」などの連体助詞「つ」の異形態の一つとして数えられるものであろう。

4)(1)における「シコトメ」は、「シコ<sub>2</sub>」の仮名遣いが異なるけれども、恐らく「醜と売」を表したものであろう。戸籍にも「志許豆売」(1/133)、「志去売」(2/221)と、乙類で表記されている。「ト」は、連体助詞「つ」の異形態の例であろう。(2)①②③における用例は、何れも「石凝ど売」を表したものと考えられる。その際の「ド(度)・ト<sub>2</sub>(止)」は、頭子音の別(清・濁)及び母音の別(甲類・乙類)をそれぞれ異にしているが、やはり連



体助詞「つ」の異形態の例であると考えられる。(3)における「ト<sub>2</sub>(止)」も、他に

・蛟 美豆知(倭名類聚抄・元和本、巻19・1ウ)

・蛟 美都知(倭名類聚抄・箋注本、巻8・2オ)

などの用例が見当たるように、連体助詞「つ」の異形態を表したものと考えられる。その語源として「巳(ミ<sub>2</sub>)+ツ+霊」の語構成が考えられているが<sup>(注12)</sup>、戸籍類以外の上代文献に現れている用例は全部甲類の「ミ」だけである。(4)における「ヲトコ」「ヲトメ」は、若者の意味を持つ語であるが、その語源は、「ヲ(小)+ト(連体助詞「つ」の異形態)+コ(子)」「ヲ(小)+ト(連体助詞「つ」の異形態)+メ(女)」の語構成によるものと考えられる。なお、普通の男子・女子の意味を持つ「ヲノコ」「メノコ」の語源は、「ヲ(男)+ノ(連体助詞)+コ(子)」「メ(女)+ノ(連体助詞)+コ(子)」の語構成と考えられる。この対の類似語における対応例は、連体格という同一機能を担うこれら両助詞(「ト」「ノ」)の形態分担による意味分化例として考えられるものであろう。

5)(1)における①②③④⑤は、日本書紀古点本における古代韓国関係語彙に対する和訓の用例である。これらの表記は、それぞれ中世韓国語に現れる「우회入-(上、u・hwi・s)」「아래入-(下、a・rae・s)」「알뻘入-(南・前、al・pʌi・s)」を表したものであろう。この場合の「入(s)」は、日本語における連体助詞「つ」と全く同じ機能を持つ持格助詞「s」である<sup>(注13)</sup>。(2)の用例も、日本書紀に現れる古代韓国関係語彙であるが、①②における「尸・志」は、中世韓国語に見える「쇼・소(牛、syo・so)」と「마리・머리(頭、ma ri・mari)」とにおける複合語の間に使われた持格助詞であり、③④の「叱」も、人名などにおける接尾語的な役割を果たす「지・치(ʒi・ʒ'i)」の前に使われた持格助詞である。この「叱」は、穿母(ʒ'-)の字母で、日本書紀における古代韓国関係記述以外においては、上代文献にその用例が見られないものであるが、古代韓国の郷歌では合わせて90の用例が見受けられ、そのうち約40例が持格助詞として使われており<sup>(注14)</sup>、以降の吏読資料における持格助詞「s」の代表的な用字とも言えるものである。この他に、古代韓国語における持格助詞「s」の用例として推定されているものに、「尸(審母ʃ-)'」「斯(心母s-)'」「子(精母t-)'」「次(清母t'-)」などの表記例があり、これらは主に地名表記例から観察できるものである。

ところで、古代韓国語においては、頭子音の場合、有気音対無気音の音韻論的対立は存せず、なお、摩擦音系字母と破擦音系字母はこれを区別して使われたと見る見解が一般的である。ところが後者の場合、中世韓国語におけるハングル表記により推定すると、語末の場合も、これに準じたと考えられる。しかし、上記例から見るように、持格助詞「s」に使われた字母は、摩擦音系(尸・斯)と破擦音系(子・次・叱)が交差しており、上記の音韻論的事実に反する結果となる。このような用字上の混用と、中世韓国語におけるハングル表記法、諸氏による推定音価<sup>(注15)</sup>を根拠に、古代韓国語における持格助詞「s」の音価を、拙稿において/s/を基底とする弱破擦性摩擦音/'s/と推定し、これが二つの形態素の間において「促声的内破化」という音韻論的機能を遂行するに当たって、内破音/'sʷ/として機能しながら前接音節が母音で終わる場合には促声的な[t]として、有声子音の末子音を持つ場合には休止性の[ʔ]として実現され、開音節語である日本語の連体助詞「つ」( [t



u) )と音声的に似ていることを述べた。〈表3〉〈表5〉におけるサ行音系統の連体助詞「つ」の異形態は、古代韓国語の持格助詞「s」における摩擦音と破擦音とが混じる用字(尸・斯・子・次・叱などー/s//ts/、これらは何れも日本漢字音ではサ行音、中でも主に「し」として反映されるものである)と、全く軌を一にすると見られるものであり、タ行音系統のそれは、持格助詞「s」における「促声的内破化」の機能された現実音としての/t/の、多様な現れ方として捉えることが出来よう。(3)の①②における用例と、③④における用例は、それぞれ同一人名の異表記である。両方とも百濟人であり、示された人名における語義が明らかでないが、前者においては「ソネ」「ヤマミ」、後者においては「ミナ」「ホ」の複合語による語構成からなる人名であると考えられるものである。その語形から、すでに和習化されたと見られるこれらの同名異表記における「シ(志・子)」「ソ<sub>2</sub>(曾)」は、複合語の間で連体格の役割を果たす、連体助詞「つ」の異形態であると考えられる。

6)における用例は、木簡に見られるものであるが、一般の上代文献に見られるそれと比べて、連体助詞「つ」の異形態において多様な表記例の現れることが見受けられる。(2)における「宿奈麻呂」及び(3)における「宿奈売」「宿奈」は、〈表3〉における「宿奈麻呂」(1/354、499)、「宿奈売」(1/124、184、356、374、2/277)、「宿奈女」(1/309、504)、「足奈売」(1/8、31、62、89、94)、「乎足奈」(1/11)などにも見える人名表記であり、「少ない」意味を表す形容詞「スクナシ」と係わるものと見做される。ただ、上代語における「スクナシ」はク活用であって語幹が「スクナ」であるが、他にも「宿太売」(2/205、229、239)、「宿太女」(2/210、211)、「宿提売」(2/203)、「少提」(2/222)、「須古太売」(1/181、188、200)、「宿古太売」(1/102、141)、「須古多売」(1/10)、「須古提売」(1/174)、「宿古代売」(1/135)などに見られるような連体助詞「つ」の異形態「タ」「テ」との通用例が存在することから、「ナ」は連体助詞の「な」と考えられ、「スク」も「スコ」と相通じて用いられたものと考えられる。また、(3)における「志祁多」の場合も、〈表3〉における「志祁太売」(1/66、79、48)、「志祁太女」(1/18)、「志祁多売」(1/10、21、21、44)、「志祁多女」(1/1)、「志祁田売」(1/34)などの「穢い」意味を表す形容詞「シケシ」の語幹「シケ」に接続された連体助詞「つ」の異形態「タ」として考えられるものである。(3)における「否手」「否田」は共に「稲」を表す「イネ」の交替形「イナ」に連体助詞「つ」の異形態「テ」「タ」が接尾語的に使われたものであろう。なお、(3)における「須」表記は、〈表3〉にも幾つかの人名において見られるが、「多須麻呂」は、美濃国加毛郡戸籍に同様の人名(「多須麻呂」1/66)があり、「玉須」の場合も、「多真志女」(1/14)における「志」と同様の認識のもとで行われた用字であると考えられる。森山隆氏は、大日本古文書十六巻に出てくる同名異表記「田須万呂」「田次万呂」に対し、「田次万呂」は「タスキマロ」と訓むところで、「田須万呂」は筆録者の不注意や「キ」の個別的略記法、或いは「キ」音節の無声化か促音化が考えられると、述べられているが<sup>(注16)</sup>、戸籍と木簡とに出てくる連体助詞異形態の現れ方からすると、「須」と「次」とは、十分通用の可能な表記例であると考えられる。



以上、上代日本語における連体助詞「つ」及びその異形態の問題について述べてきたが、以下、次のように纏めながら本稿の結びとしたい。

戸籍などの正倉院文書における人名表記に見られる連体助詞「つ」とその異形態とは、単音節の扱い方の問題は残るものの、タ行やサ行の全列に亘っているなど、その多様さに特徴がある。そして、それは母音交替・子音交替など日本語内部における問題として扱うことも可能だが、日本・韓国両語において連体格成分となるといった文法的用法の近似性や、人名に現れた連体助詞「つ」とその異形態の表記様相が古代韓国語の持格助詞「s」の音価及び用字範囲内に収まることなどから、上代日本語の助詞「つ」とその語脈を同じくするのではないかという山田孝雄氏の推論の妥当性を認めるべきであろう。

一方、連体助詞「つ」の異形態の例が戸籍・木簡などにおける人名に多く現れる裏側には、文献の質というものが考えられる。それは実用を旨とする上記のような文献において、日常口語があるがまま露出されたためであろう。それに、人名という固有名詞の持つ一般論的な属性上、昔ながらの言語習慣を受け継いでいることも、連体助詞「つ」における異形態の多く見られる原因として考えられる。さらに、人名においては「つ」が連体格成分としては、必ずしも十分に機能していないという点も看過できない。それは人名がそれ自体で一語であるという点と、既述の連体助詞終わりの人名が存在することから知られるように、「つ」が人名においては接尾語化しているという点である。文法的な性質が希薄になることと、「つ」の異形態が多く現れるということとは無関係ではないと考えられる。

連体助詞「つ」表記におけるタ行・サ行の多様な現れ方は、結局のところ、古代韓国語における持格助詞「s」の用字及び音価と深く係わるものであると考えられる。村山七郎氏は、上代日本語における属格接尾辞にはno、na及び\*n(連濁をひきおこした場合の)があり、一方、トルコ語、蒙古語、ツングース・満州語の属格接尾辞から出発して、アルタイ基本言語に対し基本形として推定されている\*nがあると指摘された後、日本語のno及びnaはその母音化形と見做すことができると述べられている<sup>(1)(2)</sup>。もし、勝手な憶測が許されるならば、戸籍などにおける人名表記に見られる連体助詞「つ」の多様な異形態は、上代における盛んな人的流入の中で持ち込まれた古代韓国語における持格助詞「s」の用字(「-s・-ts」)及びその音価(「-t」)の、村山氏の言われるその母音化形—即ち、音節化形—として見做すことも可能なのではなかろうか。古代韓国語では持格助詞「s」を子音文字として取り出しており、そういった子音要素を開音節構造に音転写する場合の許容範囲を連体助詞「つ」の人名での在り方は示していると考えられるのである。

## 注

(1) 大野 晋 他 編『岩波古語辞典(補訂版)』pp. 1484-85、岩波書店、1990年。

(2) 山田孝雄『奈良朝文法史』pp. 417-19、1913年(後改版、1954年、宝文館)。

(3) 中川浩文「助詞「の」「が」「つ」の原初的性格について」(『女子大文』(京都女子大学国文学会)第10号、1958年10月)

(4) 拙稿「上代日本語の格助詞「ツ」に関する研究—古代韓国語の持格助詞「s」との関連性を中心に—」(『日本学報』第42輯、韓国日本学会、1999年6月)



(5) 資料は大日本古文書によった。( )内の数字は巻次及び頁を示したものである。なお、年次は、岸俊男『日本古代籍帳の研究』(塙書房、昭和48年)所収の「現存古代籍帳一覧表」を参照した。

- |  |  |
|--|--|
| A <sub>1</sub> 濃国味蜂間郡春部里戸籍; 702年(1/1~24)                           | A <sub>2</sub> 美濃国本簀郡栗栖太里戸籍; 702年(1/24~40)     |
| A <sub>3</sub> 美濃国肩負郡肩ノ里戸籍; 702年(1/40~44)                          | A <sub>4</sub> 美濃国各牟郡中里戸籍; 702年(1/44~46)       |
| A <sub>5</sub> 美濃国山方郡三井田里戸籍; 702年(1/48~56)                         | A <sub>6</sub> 美濃国加毛郡半布里戸籍; 702年(1/56~96)      |
| A <sub>7-1</sub> 美濃国郡里未詳戸籍1; 702年(1/46~47)                         | A <sub>7-2</sub> 美濃国郡里未詳戸籍2; 702年(1/47~48)     |
| A <sub>7-3</sub> 美濃国郡里未詳戸籍3; 702年(1/96)                            |  |
| B 筑前国嶋郡川邊里戸籍; 702年(1/97~142)                                       | C <sub>1</sub> 豊前国上三毛郡塔里戸籍; 702年(1/142~154)    |
| C <sub>2</sub> 豊前国上三毛郡加目久也里戸籍; 702年(1/155~162、196~197、202、203~204) |  |
| C <sub>3</sub> 豊前国仲津郡丁里戸籍; 702年(1/162~214)                         | D 豊後国郡里未詳戸籍; 702年(1/214~218)                   |
| E <sub>1</sub> 下総国葛飾郡大嶋郷戸籍; 721年(1/219~291)                        | E <sub>2</sub> 下総国倉麻郡意布郷戸籍; 721年(1/292~301)    |
| E <sub>3</sub> 下総国鉦托郡小幡郷戸籍; 721年(1/301~303)                        | F 陸奥国郡里未詳戸籍; 708年(1/305~308)                   |
| G 常陸国郡郷未詳戸籍; 785年(1/308~317)                                       | H 讃岐国郡郷未詳戸籍; 757年~773年(1/317~318)              |
| I 因幡国郡郷戸籍; 757年~772年(1/318~323)                                    | J 国郡郷未詳戸籍; 757年~765年(1/323~325)                |
| K <sub>1</sub> 近江国志何郡計帳1; 724年(1/329~330)                          | K <sub>2</sub> 近江国志何郡計帳2; 725年(1/331~332)      |
| K <sub>3</sub> 近江国志何郡計帳3; 729年(1/387~389)                          | K <sub>4</sub> 近江国志何郡計帳4; 730年(1/391~392)      |
| K <sub>5</sub> 近江国志何郡計帳5; 731年(1/440~441)                          | K <sub>6</sub> 近江国志何郡計帳6; 732年(1/450)          |
| K <sub>7</sub> 近江国志何郡計帳7; 733年(1/504~505)                          | K <sub>8</sub> 近江国志何郡計帳8; 734年(1/621~622)      |
| K <sub>9</sub> 近江国古市郷計帳9; 742年(2/326~339)                          |  |
| L <sub>1</sub> 山背国愛宕郡雲上里計帳; 726年(1/333~352、380)                    | L <sub>2</sub> 山背国愛宕郡雲下里計帳; 726年(1/353~380)    |
| L <sub>3</sub> 山背国愛宕郡郷里未詳計帳; 733年(1/505~549)                       | L <sub>4</sub> 山背国綴喜郡大住郷(?)計帳; 735年(1/641~651) |
| M <sub>1</sub> 右京計帳1; 733年(1/481~501)                              | M <sub>2</sub> 右京計帳2; 731年(1/502~504)          |
| M <sub>3</sub> 右京計帳3; 733年(24/16)                                  |  |
| N 出雲国大税賑給歴名帳; 739年(2/201~247)                                      | O 越前国江沼郡山背郷計帳; 740年(2/273~280)                 |
| P 東大寺奴婢籍帳; 772年(6/427~446)   | Q <sub>1</sub> 班田司歴名; 755年(4/81~82)            |
| Q <sub>2</sub> 考唱不参歴名; 758年(4/344~345)                             | Q <sub>3</sub> 佛事捧物歴名; 769年(5/705~708)         |
| Q <sub>4</sub> 月借錢請人歴名; 772年(6/314~315)                            | Q <sub>5</sub> 上階官人歴名; 738年(24/74~75)          |
| Q <sub>6</sub> 官人歴名; 738年(24/84~85)                                | Q <sub>7</sub> 官人歴名; 738年(24/85~86)            |
| Q <sub>8</sub> 写論疏手実未上人等歴名; 744年(24/291~292)                       | Q <sub>9</sub> 可充布施経師歴名; 746年(24/327)          |

(6) 井手 至「古代の語彙 I」(阪倉篤義 編『講座国語史3(語彙史)』所収、大修館書店、昭和46年)

(7) 阪倉篤義『日本語表現の流れ』(「第二章 語彙の変遷」、岩波書店、1993年)による。氏は同書で上代語における単音節語が多音節語に移行する現象に対して、「表現法の変化」として捉えられ、その肥大への方式を(1)接頭語的なものを添えるもの、(2)接尾語的なものを添えるもの、(3)説明的要素の語を後に添えて複合語を作るもの、(4)説明的要素の語を修飾的に前に添えて複合語を作るもの、(5)語形を拡張して語としての確立を計るもの、と五つに分けられ、それによって、単音節語の持つ曖昧さに代わる、よりの確な語としての表現を試みると同時に、また、語としての自立性を確立しようとするものであったと述べられた。人名における名の形態素としての単音節語の場合は、普通の単音節語における多音節語への移行の場合と事情は若干異なるであろうが、大体において氏分類の(1)(2)(4)は適用できるものと考えられる。即ち「こ(子)」を含む多くの単音節語に上接するものは(1)(4)の場合であり、単音節語・2音節語における連体助詞「つ」及びその異形態の場合も、男性名における多くの連体助詞終りの用例の存することから、(2)の接尾語的なものと見做すことができよう。



(8) ここでA群はその語義のいまいち不明なもの、B群は比較的その語義の明らかなものを表すが、1音節語においては十二支など幾つかの明らかなもの以外には全部A群に入れた。

(9)「かぐ」は「かぎろひ(陽炎)」における「かぎ」と通ずるものとされる。なお、「おく」「ゆ」の例も、それぞれ「おき」「い」と通ずるとされるもので、何れも転換例としてウ列以外のものを持っており注意される。

(10) 西宮一民「上代日本語の固有名詞の表記」(『万葉』第165号、1998年3月)

(11) 金沢庄三郎『日鮮同祖論』(東アジア叢書6)pp. 12-16、成甲書房、1978年。

(12)『時代別国語大辞典—上代編』(三省堂、1967年)における「みっち」項目の説明による。

(13) この助詞は、他にその機能と係わらせて「所有格、属格、冠形格」などと冠することがあるが、ここでは「持格助詞」と呼称する。

(14) (注4)における拙稿での調査による。

(15) 朴炳采『古代国語の研究』高麗大学校出版部、1971年。許 雄『国語音韻学』saim文化社、1985年。チェナムヒー「古代国語資料「叱」の音価と機能」(『ハングル』第224号、1994年6月)などを参照。

(16) 森山隆「上代人名の略記について」(『上代国語の研究』所収、桜楓社、1986年)

(17) 村山七郎「万葉語の語源—日本語の系統論に関連して—」(『国文学解釈と鑑賞』昭和31年10月号)

〔付記〕本稿は(財)日韓文化交流基金の招聘(1999年3月1日～2000年2月29日)を受けて行われた研究の一部である。なお、本稿を成すに当たって、毛利正守先生より懇切なるご教示をいただいた。記して心より感謝申し上げる。

— 本学客員教授 —